

2024 後期「公共哲学Ⅱ」

《中間テスト：配点 30 点》

(1) 「無知のヴェール」について説明してください。(2) 無知のヴェールの下で考えたら受け入れられない、と思われるルールを実生活の中から一つ挙げ、それが受け入れられない理由と、無知のヴェールの下ではどう改善されるかの見通しを、それぞれ説明してください。

《期末テスト：配点 70 点》

A. 以下の問いについて、選択肢から最も適切なものを一つ選ぶ形で解答してください。

(1 問 10 点)

(1) ジョン・ロールズがその著書『正義論』において主題とした「正義」とは、「人々のあいだに利益と負担が正しく割り当てられること」だが、この「正義」の意味の説明として適切なものはどれか。

1. 人々が社会の中で、互いに支え合うことによって豊かな生活を送っている以上、一部の人々が過大な利益を得たり、過大な負担を負わされたりするのは不正である、ということ。
2. 社会全体の発展のためには、個人は自らの利益追求を諦めて全体のための負担を受け入れなければならないのであり、個人的の利害関心に基づいて行為するのは不正である、ということ。
3. 窃盗や略奪といった不正な形での利益取得は不正であり、取り締まられなければならないということ、およびその取り締まりのための負担は不正をなした本人が負わなければならないということ。
4. 個々人の享受するあらゆる利益は他者への負担を伴ってはならないのであり、いかなる形であれ他者に負担を課すような行為はすべて不正である、ということ。

(2) ジョン・ロールズは上記の「正義」を規定する原理の導出において、「無知のヴェール」の下での仮想的契約というロジック（これを「公正としての正義」と呼ぶ）を用いたが、そのようなロジックを用いた理由の説明として適切なものはどれか。

1. 「無知のヴェール」を用いることで、必要な知識をもたない（つまり無知な）人々を合意の舞台から排除し、それによって適切な知的土台を共有した上で社会のルールを検討できるようになるから。
2. 「無知のヴェール」を用いることで、社会のルールを考えるにあたり、個々人が自己の利益を他者の利益より優先することが不可能になるから。
3. 「無知のヴェール」を用いることで、統治する側の人間が、秩序に服する側の人々のあいだの差異にまどわされず、公正に統治することができるようになるから。

4. 「無知のヴェール」を用いることで、複雑でもはや解決しようがない対立の歴史については不問とし、いまこの時点から対等な関係の上に社会制度を構築していくことができるようになるから。

(3) ロバート・ノージックはその著書『アナーキー・国家・ユートピア』の中で、ロールズの上記の「公正としての正義」のロジックを批判したが、その批判の論旨の説明として適切なものはどれか。

1. 現実には成立しえない仮想的な合意は、現実の正義を論じる上では役に立たない。
2. 社会のルールをめぐる合意の前段階にあるはずの、社会の形成についての合意を無視している。
3. すべての個人は自己の所有権を自然権として有するのだと、根拠なしに前提している。
4. アメリカの人々はすでに政治的に無知であり、わざわざ無知のヴェールを想定する意味はない。

(4) ノージック自身は所有権の絶対不可侵を原則とする正義の原理（すなわちリバタリアニズムの正義）を組み立てたが、その原理の抱える問題点として適切なものはどれか。

1. 所有権の正当な取得について、取得時点をどれだけ過去に遡って特定すればよいのか不明確である。
2. 所有権の正当な移転について、移転についての当事者の自発性の問題を無視してしまっている。
3. 所有権の正当な相続について、男性中心的な偏った制度が導かれてしまう。
4. 所有権の正当な保護について、国家のはたす役割を大きく認めてしまっている。

B. 以下の問いについて、選択肢から適切なものをすべて選ぶ形で解答してください。

(1問10点、完全正答のみ得点を与えます)

(5) マイケル・サンデルもまた、その著書『リベラリズムと正義の限界』において、ロールズの「公正としての正義」のロジックを批判したが、その批判の論旨の説明として適切なものはどれか。

1. 無知のヴェールの下で正義の原理を構想する人々は、その原理に従うことになる人々に比べて相対的に大きな権力を持つことになるため、人々の間の対等性が損なわれてしまう。
2. 無知のヴェールによって誰がコミュニティにより大きく貢献しているのかが見えなくなってしまえば、コミュニティ内の日々の民主主義の実践が破綻してしまう。
3. 無知のヴェールによって人々は、国家に対して有するはずの義務を放棄し、自己利益のみを追求する「負荷なき自己」となってしまふ。
4. 無知のヴェールによって自らの所属する共同体の価値観を参照できなくなってしまうと、人々がなす合意や契約は個人のアイデンティティから乖離した、空虚なものとならざるをえない。

(6) スーザン・オーキンもやはり、その著書『正義・ジェンダー・家族』において、ロールズの「公正としての正義」のロジックを批判したが、その批判の論旨の説明として適切なものはどれか。

1. 社会制度の不正義のみが問題とされており、家庭内の不正義が考察の対象外となっている。
2. 無知のヴェールは貧富の格差や人種差別の問題に対しては有効に機能するが、ジェンダー格差の問題には通用しない。
3. 私的領域において個々人の価値観を全面的に尊重すると、人々のあいだで共有された価値観の中に埋め込まれた構造的なジェンダー格差が温存されてしまう。
4. 私的領域における不正義も社会制度の影響を受けており、それゆえ社会制度の修正を通じて改善可能であるのに、その可能性が十分に論じられていない。

(7) アマルティア・センも同様に、その著書『正義のアイデア』において、ロールズの「公正としての正義」のロジックを批判したが、その批判の論旨の説明として適切なものはどれか。

1. 「無知のヴェール」は正義をめぐる判断を不偏的に下すことを目指しているが、正義に必要なのは不偏性（偏りがいないこと）ではなく普遍性（あらゆる状況に適用できること）である。
2. 正義にかなった社会を組み立てる上で、理想的で完全な正義の構想を求めることは不必要である。
3. 正義をめぐる人々の見解の相違の深さを考えれば、単一の正義の構想への合意は不可能である。
4. 明白な不正義を析出するためには、「無知のヴェール」によって判断に利用できる情報を切り詰めるよりも、情報を増やして比較可能性を向上させるほうが良い。

以上